新暦明解

天

東京圖書館
新門 函六一
部五一 架四一
類五 號二一八五

特37
429
一

共貳本

056260-001-5

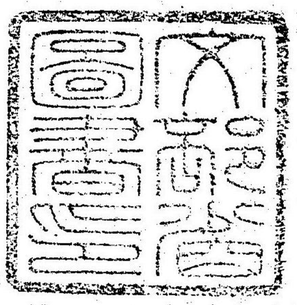
特37-429

新暦明解（初編）天・地

黒田 行元／著

M6
CAK-0176

特37
429



叢洲本

新刊陽曆布寮

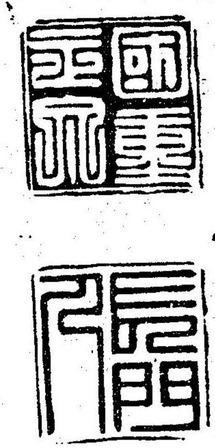
埏節庚辰之金

不偏堪仰

神皇登極後
二千五百卅二
年

今歲一月百作童謠
代題辭

半山房主人



東京帝國大學圖書之印

新曆明解

題言

昔日吾先子洋學ノ將ニ大ニ行ハレンヿヲ
察シ夙ニ余ニ和蘭ノ學ヲ修メシム余稟賦
薄弱資性鈍駑業ヲ成ス甚タ遲ク加フルニ
當時學運猶否塞ニ屬シ人或ハ目ノ蠻夷ノ學
子弟ヲ教ユル呼ニ非ザルヲ以シ遂ニ其遊
學ヲ拒ムニ至ル所謂攘夷家ナルモノ比屋
皆是ナリ親戚ト雖猶切齒扼腕シテ以怒視

スルニ至ル實ニ其處置ノ難キヲ見ルベシ此ノ時ニ當テ先子務メテコレヲ保護シ以學ヲ廢スルニ至ラザラシム然ルニ嘉永通信ヨリ以往時勢頓ニ變シ開化ノ速カナル洋學ノ盛ナル愕然遥ニ意表ニ出ツ豈計ンヤ輙道電機ノ設ケコレヲ吾東方地風俗ヲ殊ニシ人種族ヲ異ニスルノ絶域ニ見ントハ況ンヤ紀元改暦ノ令才ヤ往時ヲ顧念スルニ茫然トシテ夢況啻ナラズ而先子名善字元民梁洲ト号ス歿シテ今已ニ久シ恨ラクハ方今ノ隆盛コレヲ生前ニ見セシムル能ハサルヲ由テ深ク其時ニ及バサルヲ憾ム先子又天文暦算ノ學ヲ好ム嘗テ余ヲシテ大陽大陰配合暦ヲ造ラシメコレヲ同志ニ分チ以テ斯學ヲ誘クノ萬一ヲ庶幾ス爾来志ヲ繼テ年毎ニ刷出シ以今日ニ至ル然ルニ今現ニ改暦ノ令アリ驚喜ニ堪ヘズ今ニシテ後頒暦全ク西法ノ如クナレバ何ッ更ニコレヲ

配スルヲ待ン令出テヨリ以来其舊暦ニ異ナルヲ以来テ大陽暦ノ説ヲ扣ク者多シ一一指畫ニ苦ムヨリ一夜筆ヲ拈テ謾ニ先子手澤ノ書ヲ獺祭シ抄録シテ以コノ小冊ヲ艸ス苟且ノ間説ク所全カラス唯問ニ答フルノ勞ニ代フ其成説ノ如キハ世固ヨリ書ニ乏カラズ頃日書肆石田氏稿本ヲ見テ切ニコレヲ世ニ公ニセンヿヲ乞フ余曰倉卒ノ作鹵莽滅裂何フ以コレヲ公ニセント辞スレ𪜈得ズ遂ニ其請ニ任ス然ルニ余偶其官ノ囑ニ由テ期ヲ刻シテ譯述スル所アリ故ヲ以コレヲ校スルノ暇ヲ得ズ輙門人横田重登二子梁洲ニ付シテ畧校シテ以授ク篇本ヨリ尚且ニ成リ校モ亦黄口ノ手ニ出ツレバ粗漏極ノテ多カルベシ其爺正刪削ノ如キハ悉ク皆後賢ノ高手ヲ仰ク刻スルニ方テ往事ヲ追念シ僅カニ先子ノ心ヲ焦スル所ヲ表シ其由ヲ記シテ以題言ニ代ユ

明治六年一月

黒田行元　誌

新暦明解

目次

大陰暦法の解
大陽暦法の解
天文二家の辨
占候天學種類
實測天學説
渾天説の大畧
地動説の大畧

時刻の解
千八百六十六年和蘭頒暦暑表
遊星の大小光日と距るの遠近表
年月區別
七曜日
年圏并五帯

新暦明解二編

目次

天體區別の解
遊星行圏規則
日中線の解緯經
月蝕の解
視實兩動
地圓の五證
平年閏年を知る法

各星詳說

新暦下段の解
彗星の解
諸月
天河の説
天文雑説
潮汐の説
氣中發象諸説

新暦明解

黒田行元　編

大陰暦法の解

夫れ天は圓にして日月二輪あるを運る事衆人日々見る所あり其日輪は彼醫者藥屋抔の祝ひ日とする冬至といふ日より運り初めて段々進み三百六十五日と三時に至りて次の冬至に至るを一年といふ又月は二十九日半にして一周を由て十二回運

る日數三百五十四日を一年とをもべ月の運る日數ゐゐ能く合へた日の天を運る真の一年ゐゐ猶十一日程ゐ不足おりあもゐ二十九日半ゐ十二を乗けて見ても知るへ由て此十一日程を三年溜め置ゐ三十三日餘ゐおるを一月の日數ゐ足る程切りと為て其年ゐ一月を増し加へて十三月とし此月を閏月とも此月ゐ天子門ゐ住れせ玉ふといふ故事より門の内ゐ王の字をかく

ゐ右の如く閏月を置くゆへ一年の日數三百五十四日の事あ又三百八十四日の事あて一年の日數多少不揃ひゐ叔一年ゐゐ春夏秋冬の四季あ月々ゐゐ節と中あて都合二十四節あり此四季と二十四節ゐ日の天を運る日數三百六十五日と三時といふゐ隨ふ者ゆへ日の一年を四ゐ割二十四ゐ割て月の運るゐ拘とらされを其月の節月頭朔日二日頃ゐ

節ハ入る事もあり七日八日頃の事もあり又中頃ハ至る事もあり又前月の月末ハ當月の節ハ入る事あり四季ハ氣節ハ隨ふ者也へ年の内ハ春の来る事あり所謂年内立春の事ハ又年明け元日ハ春とても前年十二月の節ハて正月中頃ハ始めて當年の正月の節ハ入る事あり其節の代り目を節分とて人々炒豆を撒き儺して年を取事を邦俗とせり古れい真の春ハ成たる故ハ

右の如く年の日數多少不同ありて又四季も年の内ハ代り又翌年へ押し色々ハ替ハる様ハ立たる暦の法を大陰暦といふハ大陰ハ月の事ハ故ハ大陰暦とハ月を主ハ立たる暦法と云事ハ月を主とするゆへ晦日ハ恒ハ闇して十五日ハ恒ハ滿月也潮の干満も全く一月の日を次弟ハ數へて知る色し由て月ハ恒ハ正しく出入ハ氣節四季ハ恒ハ狂いて出入あり所謂大陰暦の

名の起る所なり上古の世界中皆此大陰暦おのゝ一月二月と數ゆる事ハ今ハ至るまて變る事なけれ共月を主と立て定めたるよふ思へる今も大陰暦を用ゆる國々い猶太國回々國印度諸島支那皇國等あり恐くハ梵暦も其内なるべし皇朝の暦ハ推古天皇始めて支那暦を用ひ玉ひしより今年迄一千二百七十年なり則年月時日ハ至るまで甲子二十八宿を配する事両國暦

事なゝ古きハ回暦梵暦ハかゝる事なり此暦法概四千年前上古支那の天子堯帝の頃よりおこを用ひて方今ハ至り尚變る事なゝ

大陽暦法の解

大陰暦ハ言ひゝ如く日輪天を運りて一周する日數十二ヶ月と十一日なれハ三百六十五ヶ日なり是を一年として月の滿月三日月或ハ闇となる等ハ拘らず十二限ハ分る

ち一月二月と立て〻閏月を置くを毎年三百六十五ケ日と定め日の一周をそろ日數を一年として氣節四季を配分け立春なども必正月冬至おれば必冬至といふ樣ふ日を主として立たるを大陽曆といふ即此度御改正の曆法なり此曆ハ即一年の日數も月の大小も永久一定して變ゐ事おく至極便利の法なり此法ハ西洋紀元前四十五年我崇神天皇五十三年伊太里亞國生儒畧談

撮始りて定りて所なり

天文二家の辨

天文の一科其初めハ象と觀時と授くるの學ある事世界萬國變る事おし然るおれ共次て天上ハ現ハるゝ諸象常ハ地上人世の吉凶ハ關係をる說起り是亦甚さ古くして萬國輙を同ふそる所なを辨へハ君ハ累德有て日蝕し天喪亂を降して彗現ハるを云を祖として以方今頒曆の中段下段ハ

る者か至り皆同源か帰着する東洋西洋唯一説の傳播せしかあらず東西各々説を為せる所かり敢て雷同せず故か其説く所亦判然として差異あり天文の名西洋にれを目して星學と名け又天體學と名く元来實測を主とする學かり敢てこれを占候か事か用ゐべからざる然るか天上の發現下人生の吉凶か感ずるの説ありを傳ふる事亦甚古しき事全く二端か渉るを以てこれを

目して暫く占候天學とし正真の天學を目して實測天學とし以其臧否を分つ元来占候天學か方今文明の學上より論ずれか決して學術の域か容るゝを許さず學と名くべきの謂かし

占候天學種類

占候の天學か已か上か論ずし如く今より出き顧みれか愚妄甚しと雖古より其説盛かりされ又一か愚なる者かあらざる或か

之を託して民を教導し或いは禍福を以て君上を誡めたる者もあるとも其後世の流弊更に堪ゆべからざる者あるを大別して東西の二法とす東方の法は支那を祖とし近隣の諸國皆ゆるを奉ぜ上古の日蝕を数ひ中古分野の説客星彗孛白虹紫氣の類其説数舉に遑わらず皆支那の説ふして日の吉凶等は多くは道士の説く所より西説に至ては判然として別に一家を為せる者

ふして其説く所は印度の説も西洋の説も全く始を同ふせず所謂七曜を以て吉凶を占ふを以て見るべし譬へば日曜直日は策命し官を拜し遠行し福を造る等に宜しく此日を以て生る人は智に足り端正にして美貌孝順なりといふ如き宿曜經に曰ふ所全く西洋に唱ふる所の七曜占斷家の説に符節吻合を同軌と參詳すべし別著梵西支那の陰陽家明子を推して占ふ者所謂六甲六壬の説と毫

も相渉らぎ唯年月時日を占もるか時を以
重しとるい東西一轍かを然まともあれ
全く暗合もる者かて互か相傳へたる者か
あらざる事明るかを本邦の説く所い一二
の倍忌支那よりせさる者わせと雖強半陰
陽家の説を受し者かを又佛家の説く所も
其間か交ると雖盛か行いる者かあらば
右の如く東西二家か分るを所説一致せぎ
と雖日月二光い天上かあを光明著然たる

者かして日輪を主ともる事も又暗合を即
陰陽家の貴登天門時定局日躔何の宮か在
るの類かを又西説の七曜い其數四を乗ト
て二十八宿か配當をべれを以相通ト用ゐ
る事亦多し即房虚昴星の四宿を以禮拜日
とし閏年平年を推そか某の宿の値年を用
ゆるう如き類かを
支那本邦か於て家相方位の吉凶を説く事
ふをを暦家か屬を猶西洋七曜占斷家の天

學ハ屬するが如し其始めを知らざると雖孟子ハ天時の説あり孔子家語ハ東益の宅不祥の語あり降て漢代五行配當の説晉の郭璞張載ハ至りて其説益多し又建除滿平十二辰ハ淮南子天文訓ハ出つゝあるも皆甲子大歳河圖洛書を本として附演したる五行配當の説より起る所ハ今ハ至りてハ人皆其非を知るゝ敢てあるもと細論せず

實測天學説

實測の天學ハ西洋ハ於て其始めを知らざるといふを以見るべし古き事甚しふして後世知るべからざるあり古説ハ須彌の説ハ似たる者あり即タレス人の説く所あり其説支那の天學六家の内の周髀ハ似たるべし然るとも其詳なる得て知るべからず皆是上古の説ハあらず大抵周末以後の説あり支那の天文上古ハあり最信を取るべきものハ堯帝の實測あり其以前猶仰て天文

を觀みるの説なれどもおまを事實ゐ徴し難し帝已ゐ義和ゐ命じて推暦の官とを然まとも漫然としておまゐ命ぜしゐあらば日月星曜の運行を測り日行と月行との差を知るゐあらざれば置閏の法を命そる事能はを堯典ゐ述る所の暦法萬國ゐ冠絶して其時代おまゐ踰る者おし由て西洋猶古を稱して日支那人西洋ゐ依らざして上古已ゐ暦を推そを知れまと又曰く上古

の民暦を言ふものハ阪日多人カルデール人印度人及ひ支那人おり然れとも其暦算推歩の法亡て傳ハらざる假令おまを傳ふるも恐くハ精密の法あらさるへし西洋の實測信を取るべきものハギリシヤ人を始めとおまを古代の民ゐ於て最開化せる者ふまべおを其天文ゐ於る亦勉勵少からば天を測を暦を推そを上古の民よを勝またり然まとも其時猶未測器あらざ又精

密の算法をけまバ進歩十分おらぞ紀元前三百年建立せるアレキサンデリーの大學校ハて始て星曜の運行と測るこを密測の祖とも又紀元前二百七十四年ハアリスタルキュスといふ人あて地ハ圓輪の如くハ日を周りて動くおるをしとの疑ひあり其弟子ハエウクリデスエラトステネス等あり皆古昔の天學の大家おて又ヒッパルキュスといふ人一年の長さ大陽年三百六十五日いふの長さおれど

大陽年の時代を定め恒星の表を製セて紀元一百年の頃大家プトロソウスといふ人出たり概ね漢の武帝の世ハあるる其天説全く今の渾天の説おて支那の渾天の説ハ此人の説を傳へたるゝ未考へぞ其説ハ地ハ圓球ふして天の中央ハ懸り日月衆星ハ旋回ものといふ其説行ハる事千五百年代の中頃我天文ハ至る次ハ地動説の大家ニコラスコペルニキュスといふ人出たり此人千

四百七十二年ハ孛漏生國のトルン府ハ生る其天文説ハ方今用ゐる所ハ一て古今無双なる天學の大家なり其説ハ曰日ハ天の中央ハ懸り静居して動らぎ地と五星ハ日を心として旋回り月ハ地を心として旋回をなから日を旋回ると又地ハ自軸を轉回るハ由て昼夜ハ旋轉する如く見ゆるなりといふ古きハ實理ハ合一万古不易の定説なり

附説　總而天文の事ハ渾天地動共ハ容易ハ解し難き者なれ殊ハ地動説ハ四五才の時より聞則ち教ちゝ格外の才智ある人ハあらざれ容易く合點ゆるべし然るとも古れを合點するハ口傳あり凡そ人の説を信ぜる信ぜぬハ自説かゆへ由へあり先一切の天説を見も聞もせぬ前此天地の形の理を十日も廿日も自ら考へてゝ十分考へて尚分

らゐ時天文書を見たまゝ少しゝ敬服
をる心を生ぜゝ其心の生ずたる時辛
苦して唯動静の一理を解し得ゝ餘ゝ破
竹の勢ゝて悉く天文諸理を解し得ゝ
何分敬服の心の生ぜさる前ゝ講釋を
聽く事十年ゝるも書を讀む事萬巻ゝる
も遂ゝ解をる例ゝ出き天文を學ふの
奇法ゝして果して此道を能くれゝ解し
得ぞといふ事ゝ唯自暴自弃の徒ゝ至

てゝ遂ゝ解をるの期ゝるを

新暦明解